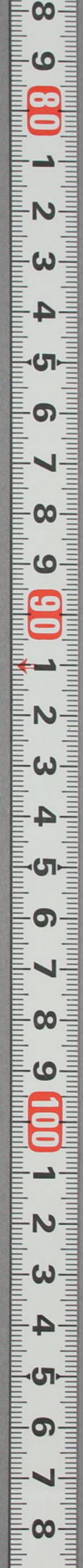




信濃地名考

中

ル4
6330
2



114
6330
2

信濃地名考中編

吉澤好謙輯

御坂

坂古事記 神御坂万葉集

信濃坂日本紀

凌雲集

山田家藏

知波夜布留賀美乃美佐賀爾怒佐麻都里伊波負

伊能知波意毛知知我多米

主帳埴科郡神人部子忍男

志雲のふもわ川は山乃うねや坂もん

能因法師

按まんをふはははけしを部のふはは坂越に幣を

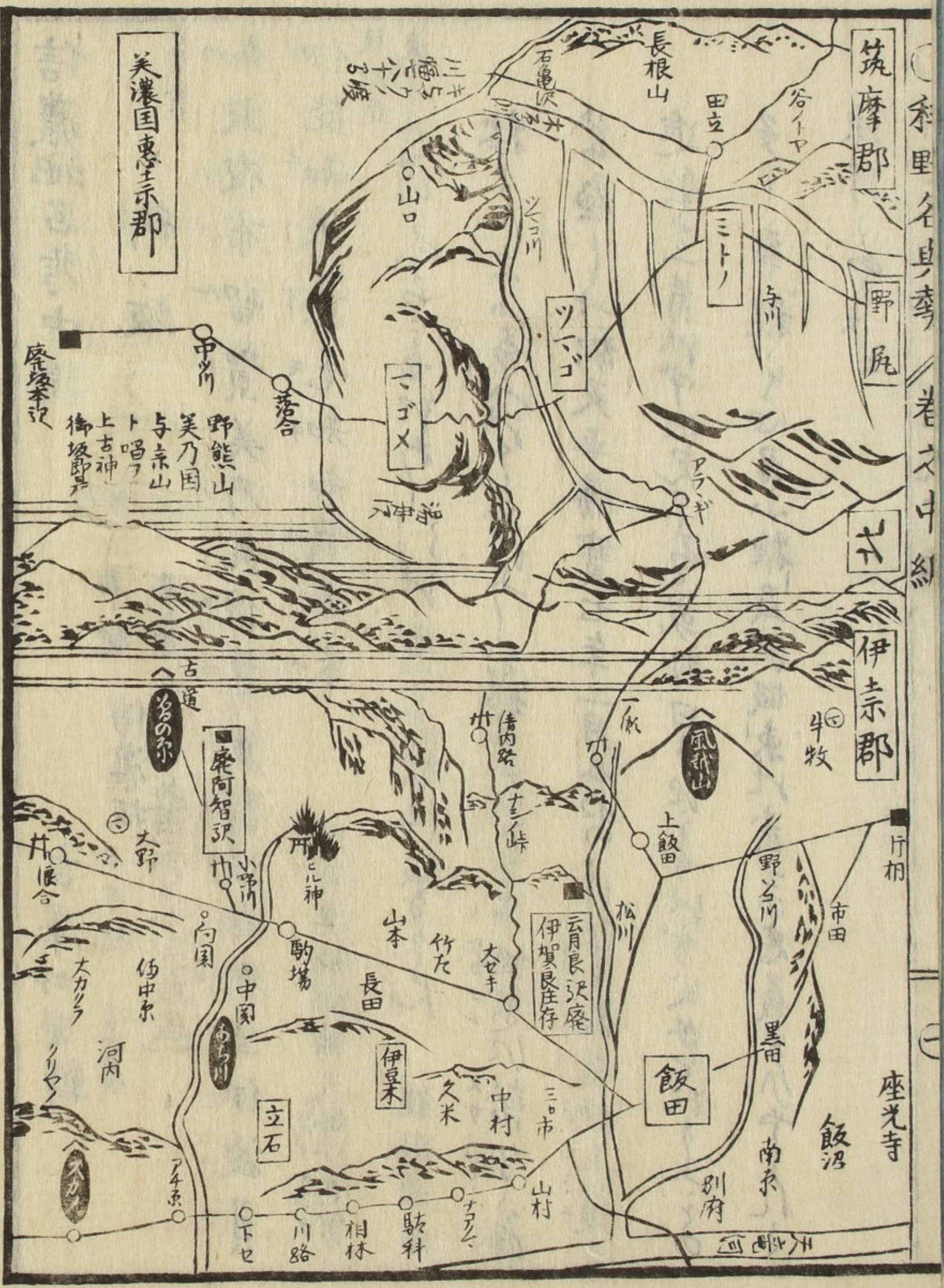
成魚一此歌天平勝寶七年二月乙卯の因防人部領使上道

進歌土首山の中にえを或抄曰ふ記よりはが父母とれりとの

多一事親は心君ふ推及び坂東は武士の忠義里ひやれと

殊修しや云

信濃地名考中編



●古事記倭武尊條曰越科野國乃言向科野之坂神而還來尾

張國云●景行紀小倭武尊信濃より美濃へ出立よと大山の坂を

越科を紀食於山中の神白さ鹿と成る漸希にきりきりを藤を

とてけりさのけしひりれを月にあたるる例とぬ是より先信濃坂を越る

よのれはく津は氣小ゆるるはひるに世時を後藤を嚼て人及び牛

馬に喰しとおのはく津は氣小わすむとわつと又曰る山中に道を先ひ

くふ小白物導なる状をくつ美濃へ出立よと

級縣渡海越山擊洲輪國經水襲國出其野國ありは後人の擬文を又木曾條

下に出せる●駒場の西五里にありに登神村あり今按登神八備字あり日本武尊

嚼蒜の地なり今阿智神社に地にいり社領十石あり切りうみに

對し小野川に也駒場より六里許あり今阿智の藤を食へり又登神村

の山より北へ五里ありの峰は美濃丹生野をどりありと飯田へ古道あり

これとたれ通路ありやうとい青良路もかやいありとおほむ

按後世志長鳥居名野の異説 實に記ふ或曰倭武尊留更

下に出せる

●宇治大納言隆國物語卷二十八曰今昔信濃守藤原陳忠といふ人

ありたり

陳忠ハ不比等の嫡武智磨ハ四男巨勢磨の後也
大納言元方は二男也正五位下信濃守に任ぜり

任國に下て國を治む

任畢にりし上より御坂を越え間に多くの馬共小荷を懸て人に乗る

中守に坐す鳥と懸橋の鉦は

今按刊行の今昔物語ハ
鉦は二字と脱せり

と踏ちて守逆さるに馬小乗りをりて落入

或按に説丈鉦
擧也と記す

吾國の俗を歴はるといふを成りけ橋首の藤原を板を傳へ大鐵鏈をりて

桁とれとせぬ者は橋のたもとにて橋板をさのし俗者もあつて家をたのみに

てりて橋のつらさはわたり 底いはいともあつて深きに守せりわたり

守の叫て物の音遂に遠くすゆに其物に當るるハ守 鎌

和名鉦曰唐韻云鐵當候反飼馬也
漢語抄云渡太古俗用棘籠二字と云

何事を宣ふと聞くと之を括籠に 縄をまくりて印行の今昔物語 括籠の二字を括籠とす

守はしき物に當りて御まをさるるを知らず括籠に多くの人が

繩をとり集りて結連りて下りて 守藤原に乗り

新古今集に及系輔尹の長志の志

坂に下りて小坂の系下りて橋人やとるるならわし

武をさるるふらひいぬぬるはあやせ屋よりかひかきり

の系村をいみへ下坂を下りて橋人のつらひ地を

園原

按園ハ備前守の加三郎の系下りてはまや本集家隆ハ
おはしとすりのあささけにうらなふらはしとあしん

新古今 園原 坂上是則

源氏物語 坂上は心とあしとさけりやうらなふらはしとあしん

扶衣
曾於系人山と定けたる事の事いぬせむけひぬりむ
後拾遺
いふとていふしあわらぬ事本はあつとはりきつれもたし
金系
事本の指やりのおほつれいふ事いぬけりい言ふ

馬内侍
師賢

奥義抄曰あねの國とて系をなすといふ事あはれやう事
本の指は金系といふ事本のこといふやれいづれ乃あしと
えいぬめりさくもいづれいんさわもね君ふさくもあしと
清少納言記とて系といふこといふ

伏屋里

ゆせ屋の説に信濃ふたをりん坂のふくとと土小埋かこいふ
よりりすとすゆふを雪深と料し或は賤の少家より雪深料り

かさうとを度野とて島にむらさき地お住むふさうに家を建て入
空のそふれと多地といふく物の伏さるる事とを屋といふ或は
岷江入楚といふ伏屋といふ系に治らるいはくはとて先原と云
按万葉卷三赤人 古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬
屋立妻問為家武勝牡鹿乃云又廬八燦ぬを乃す此
いは或は田をやむらわを賤家のひらく地にうりあふり
ぬくもいふぬん
今三河の國塚に伏地とい地名あるもいふの國
かういふ名あるの遺名なるべし

箒木

按に伊奈の事郡小母本と呼ぶる事箇系の北清内路にきき見後
つゝいふ事いふらにふさう指より事いふつれの本といふ事

志しと是をたふ本とつゞいといひしより此後ありて常本乃々を
 負へるに此れあるに坂城たかくさか深林鬱茂に天と刺を
 たるより或人説きよる一と受領いへてこれに弁をいへ
 事ありし一といひし川の巨樹あり谷より数丈のぶゆとて
 石礎にそまひ立てたて他本とたら並て梢枝言しあ扇一或
 樹多しと弁をたていへてとて小祠をたてたは是を隠し本
 とてつゞて或此すいよとてつゞたを今終母本といふ事乃々

曾乃原異説

世に名不第といつたよ里儀れを記しゆふ事多しよふは苗原ハ
 伊奈郡小野川の奥りの昔の系村に記し宗祇のておる史記に依れば

塚にあつといはし一説は系ハ小縣郡そやのといわりといふ是をたていふ
 向へ真田のたけにありて昔の系を今いふと乃々といふべし
 されば曾乃原物係小法向ニ系との多をたてたをたて書しゆと文記し
 せよ此史記中代より又いふより此の根はとて山の温泉とて思は
 りし所にゆへ真田の道に今も其をといふよりゆへ世に根は
 と記す小法とてとて此のゆへ又一説曾の原ハ佐久郡にあり
 世ハ小法の山に小法をたてたをたて梅に布施村 布施を伏屋 西の方小法
 沢といふを登りしとて古史といふ長者屋敷の記と いふ所その系村
 所記の値理し水今ありしを昔は系記といふ も日法に
 人やむかきとておのたけに記すよおの下水といふも古人の長老
 原の記に記すゆへとておぼし又本系記の記に記す系といふも又いふ系記の

和泉名與彙 卷之中編

又作久那皆掛駢の山に石を芳に系と
ししと云事 巧さうとあり

いふ事又云井那もふせ屋乃系たとりあり
堅剛達を求るに
中へ以異説あり一揆見しと

曾乃原乃山

家集といひに
それ系の山をいひて方々をくまに君も秀もあはるるこさゆく 家 持

久安五年歌合山路雪

余は小見一その系山はたききも雪はあつる雪はうらふらふ 琳仁法師

保元元年中納言家成御家哥合

とくさ刈とけり山の指くまこい川系此夜の月 源仲正

久安歌合判者取補所云それいひて山をくまに君も秀もあはるるこさゆく

山よりや竹くん不見流事も山えあはるるそのりやふせ屋乃

乃とそらみりりりすと

信濃乃野

家集
志於信乃とさういへる家のみる事ふとてあをををり 小 大 君

は歌新續古今に信濃路や本城ふたふた白流とて按うちをえ行は

路やとくは 下家集
延喜式に信濃の本城をえとて

伊那乃郡

家集
志於此ちやいふふわををかひいひつる山の音のよむはる 源 重 之

信濃路やいふやいふはるかまはしをさかめくえ先とてん 相 模

此歌は本集にいひむやの橋といふむやいふ多歌かき橋とて

菅乃荒野

按りて虹かき

信濃系流須我能安良能爾保登等藝須系久許惠

万葉卷十四国歌
シナノ系流須我能安良能爾保登等藝須系久許惠

伎氣波登伎須疑爾家里

あといのすはりや乃... 入道前内大臣

くろしぬ夏のわ... 正三位知家

志... 源師光

伊那の事部... 今

安布知乃關

安布知乃關

信... 知家

按駒場中岡向... 方

駒場と留... 延喜式に

阿智神社並に阿智驛... 阿智祝部... 吾道宮に修... 殿... 此處に伊豆本...

風越山

詞華 風... 藤原家經

千載 風... 清輔

新六 様... 公 繼

夫木 夫... 為 家

源顯仲

按飯田の西に風城山と云々低一帯小白の権況兼に白山寺あり大吉の神は湯坂の險
に摩連るひ吉蘆路のま後中つ代つら妻龍にへ伊奈小通をと見へたれど
ゆふまひ人の此山の名をゆふ中ねば

或云ふは此山は伊奈小通の神は湯坂の險に摩連るひ吉蘆路のま後中つ代つら妻龍にへ伊奈小通をと見へたれど

●今書山の多和を同地名とくはるは二川の間に伊奈郡に
二川の和田嶺にへびて北風城通るあり和田驛と野の入りと云々ハ峰瀬

山と名に風越嶺と云々 並小川 東間の東中入村下河 九千里程つててきま

地と云々一詞花千載等の本歌へは不足は思ひ此他名中代飲に詳あり

と云ひ今後又を考へ後考へは此山は北會昌會吉村田と云々

西に城跡と云々 道祖神和名太無介乃加美万手持之 山よふまると手向と云々の項と云々 四上松跡の先は城と云々

山と云々五近分跡の東風城山と云々或人彼地は風城山の歌をゆふ山屋人の依り

湯の川をがを勢ひ歎くく柳をゆりふ地角を記すんと思ふと云々

英徳のふか山と云々城の寄りのふか津の湯坂に別名をゆふ跡に云々

馮心乃里

夫木 志子のなをいぬれ都たり今誰たの先乃里と云々

玉の法法おしひたえもあふまはたのめ乃里に云々 肥 後

清少納言記も里はたのめと云々今按小野村も北あり北小野は小野の津

属筑 南小野は八彦の津に云々 属伊 每八月一日たのめあり云々

は里と云々

安多師野乃山

世くもいたのふのい志たのめをふまはるわ下野北山 名寄

わたりけし山岳伊奈郡と云蓋原のたより古道より大原をへ更級郡に
登りしやへし野不撥と云是よりとて櫛をぬぐへ若金剛峯に撥より
下りし今も安曇郡栗尾の満願寺やどりの殊勝の地なり

詠不盡山歌

万葉卷三
余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與已知其智乃國之三
中從出立有不盡能高嶺者天雲毛 下畧

或抄曰三中之字ゆ也按伊奈郡遠山に甲斐駿河之國の堺あり國は三中之
義しに加茂翁より國は三國の真中なりやわが不盡の山し三中は
いさへうと云

須波乃海

堀川百首

是れ海氷の橋なり玉振津乃るそとくふたるなり

顯 仲

壬二集

冬多し氷はくも玉津は派方のよりいあまるほゆあり

家 隆

拾五

派方の戸を巻きくも氷はくは氷にたよりそあり先

慈鎮和尚

家集

冬多し氷はくも玉津は派方のよりいあまるほゆあり

西行法師

夫木

すいの海を氷里くも氷はくは氷にたよりそあり先

為 家

按野史小洲羽池周六十七里三十一歩出鯉鮒亀甲等の説あり
未詳 今ハ氷を

流る古へに及まるといれ湖面風ひらひくも氷鏡の如く
玉は波堅凍るをいかに奏舞ありを神渡よのかくそ後ハ
やの氷のよに鳥を踊るやあは角礫の松本をいふかもある

又水とらら漁まらに腰にききと接むりあまらるる落入時と年以て死せ

或は河邊のくちか番に家船を今水の手をひく船

神波と狐のうらみ狐聴氷とくろが

古禮毛我御崎 或衣ヶ崎

須波のうらみあはれもさるにたつうきくはにおろしきや

按毎四月山のひる富士山の歌湖水にふふ衣をたてし

或曰若櫻宮天皇御製 洲輪之海衣服之崎乎来而見諸者降士之

嶽漕麼海士之鈎舟 洲輪明神天皇告曰吾父大已貴大神昔神代時大韓國大

トス且又其衣服ヲ北濱ニ埋玉テ此縁ニ因テ降士ノ嶽ノ高ヲ

深ニ寫ス此影アラシ限天皇ノ室祚尽サルレシ也ヨリテ衣ヶ崎ト云

信濃國一宮 南方刀美神社二座

名神大月次

新葉 須波の七不思議をいひかきし

按鹿頭鮭狩りも古風淳素の遺儀なり

耳裂鹿社頭雨根杉塔は影鮭狩等也

穴一依とわつれを塔の歌うつあまらる五雜俎牛首寺窓中見塔影閉門則影從門

御射山

按射八矢の古語綴靖紀一葉二葉と云ふ

玉葉 金刺盛久

毎七月廿六日御射山狩り

長官五官領家等めかり

乃神をえしん

或説乃山の神玉葉集金刺盛久と云ふ

一説云往古信乃国御射山神事假造室形茅屋ヲ
以為勅使所居今室屋香爐其模象と云

係屋はまぐら

諏方郡御射山神戶のふか嶽の麓のふかやぶと云
又筑前郡松本の本薄水の神のふかやぶを係屋と云

袖中抄

ふかのれるゆきはまぐら吹けえとてはまぐらなり

顯昭云やのりふか志願の國をさあつあるまぐら
今小縣郡塩田に保屋の地名なり也

續古今 文永二年九月十三夜野麻と

まぐらりふかはまぐらの地はれまぐらと麻もまぐら
関白左大臣

或云此が袖中抄の古歌は神と取用わらふ野の麻とあまむらとてまぐら

とまぐらとてまぐら地名なりまぐらりまぐらとてまぐらとてまぐらとてまぐら

春雨抄加字部

かぐらりまぐらのすまみまぐらにまぐらまぐらまぐらまぐら
まぐらまぐら

録集名存まぐらとて諏方の御作山案に賀鷹に備ふと云

●東鑑建曆二年八月記云可禁断雁鳥狩但於諏方大明神御執負雁鳥

者被免之云

信太社百首

信太社百首の序もろろひまぐらまぐらまぐら
宗良親王

按いもわらまぐら帝の御持れ行宮と百草りて昔をまぐら

まぐらまぐらとてまぐらまぐらとてまぐら天武天皇いま

皇太子まぐらおらせり時まぐら額田姫はまぐらの歌に
金野乃にまぐら

かぐらまぐらまぐら一鬼道のまぐらまぐらまぐら
まぐらまぐら

の尾まぐらまぐら秋まぐらのまぐらまぐらまぐら
今御射山の穂屋と

まぐらまぐらまぐらまぐらまぐらまぐら
まぐらまぐら

●みまぐらまぐら千鹿頭穂屋等の地名法郡まぐら
諏方にまぐらまぐら

射山にたつまぐらまぐらまぐらまぐら
或抄に御

五月掃く糧まぐら形似鑰鑰まぐら
上方まぐら伊勢にまぐら

風祝部

伴冊子 名寄けりしとて

源俊頼

信濃守本常路の橋咲にやとほれそふすまむわらまか

信濃守本常路の橋咲にやとほれそふすまむわらまか

信濃守本常路の橋咲にやとほれそふすまむわらまか

信濃守本常路の橋咲にやとほれそふすまむわらまか

天龍川

名寄きいふ

須波社頭雨と水源とをいふ又わらまむりもふ

わらまむりもふ

鴨長明

筑摩郡

吉蘓路

棧川山御坂

拾遺

中くはいふとて去那の多か本常路の橋をいふやを

源頼光

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

空仁法師

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

後鳥羽院
宮内卿

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

後京極摂政

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

源頼真

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

九太臣

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

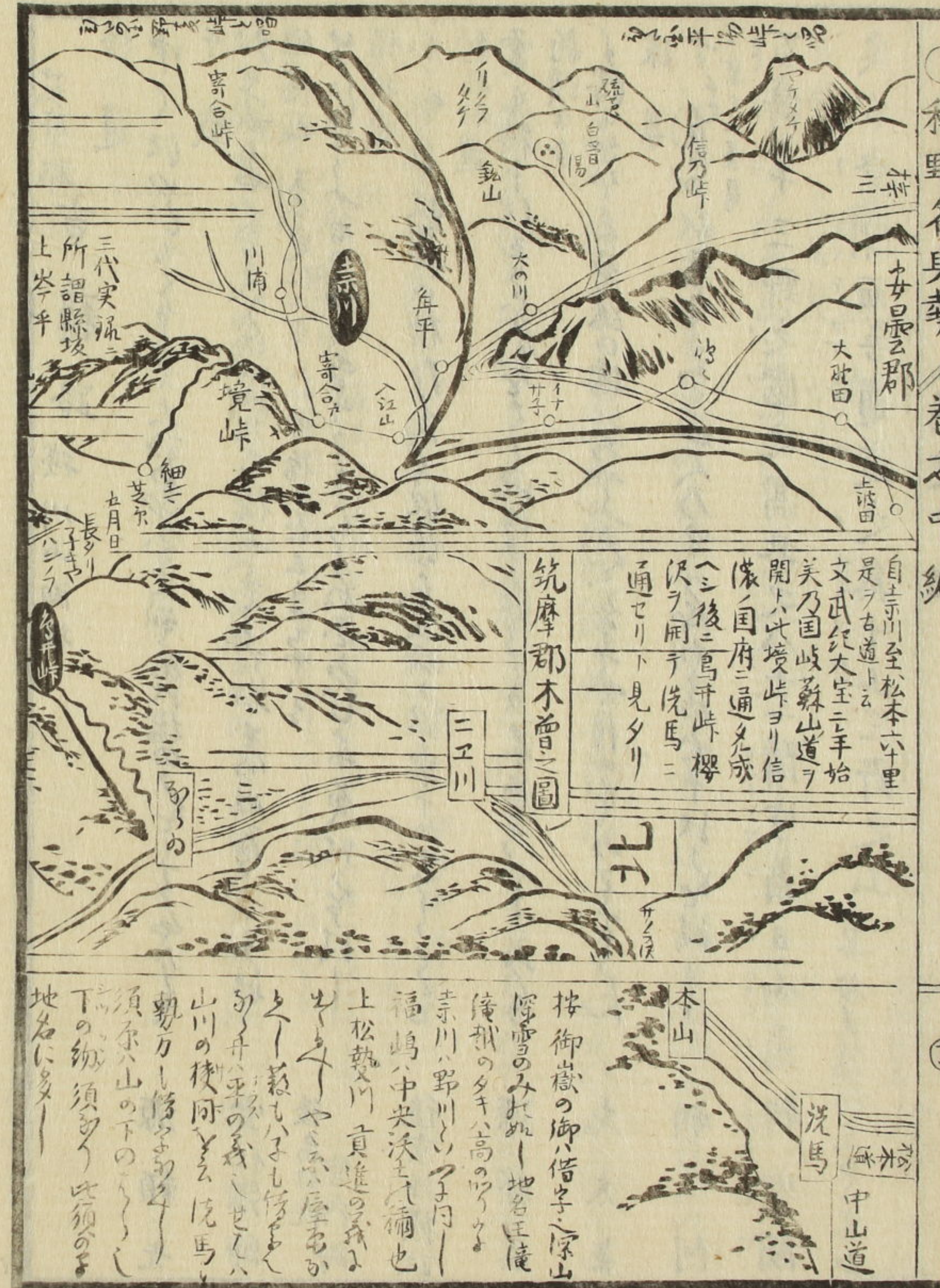
頼阿

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

行紫闕

おとけく本常路の橋をいふやをいふはぬ屋さう那

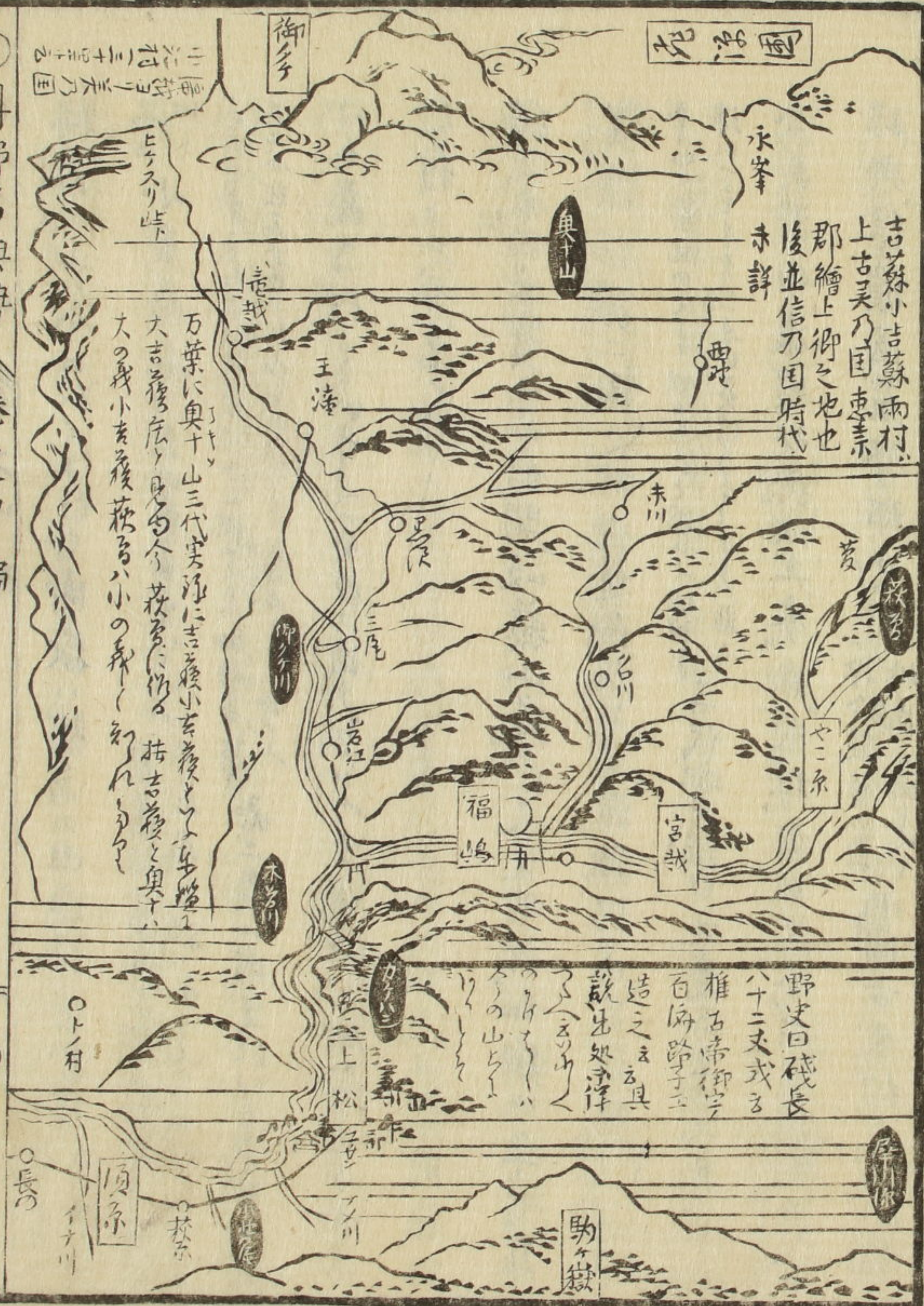
奥右登聞而吾通道之奥十山三野之山



自赤川至松本六十里
是乃古道也
文武大室三手始
美乃国岐蘇山道ヲ
開大此境峠ヨリ信
儀國府ニ通名成
ハニ後ニ高千峠櫻
沢ヲ用テ洗馬ニ
通セリト見夕リ

筑摩郡木曾之圖

按御嶽の御借字深山
厚雪のみれぬ地名正徳
徳和の夕キ高のツケ
赤川ハ野川ハツケ月
福嶋ハ中央沃土ハ福也
上松熱川貢進の義
わしハヤハ屋敷
久ハ義ハ子も傍
勿ハ井平の義ハせハ
山川の狭同ハ洗馬
勢方ハ傍ハ
須奈ハ山の下ハ
下の須須ハ此須の
地名に多



古蘇小吉蘇兩村
上古天乃国東素
郡繪上御之地也
後並信乃国時代
赤詳

万葉に奥十山三代実流に吉蘇小吉蘇とて
大古蘇底ノ日向ノ今蘇底に於テ
大の我小吉蘇蘇底ハ小の蘇ハ知れ

野史曰磯長
八十二丈或云
椎古帝御宇
百餘路子ニ
造之ニ具
説出知津
ハハハハハ
ハハハハハ
ハハハハハ

松與十山分の行人ふく御嶽、福島の西南六十里にあり

みの小吉嶺やその東の真女里といふ
茨城の谷の地名其地は信濃と通じ

四月日東より本に式に用ひたるは其系細路等には
右二ヶ所の國史に引く由り本

小吉嶺を村といふ一里の國にちこみの國府不破取らう十余日の

行程といふ是也

續日本曰大寶二年始開岐嶺山道又元明紀和銅六年七月

美濃信濃二國之堺徑道險阻往還艱難仍通吉嶺路
按今の驛路、

令美濃信濃國以縣坂上岑為國堺縣坂上岑在美濃國惠宗

郡與信濃國筑摩郡之間
按今其曾の真 兩國古來相爭境堺

未有取決貞觀中勅遣尤馬權少允從六位上藤原朝臣正範刑部

少錄從七位上執負直繼雄等與兩國司臨地相定
按美乃權守在原

守正範等檢舊記云吉嶺小吉嶺兩村是惠宗郡繪上卿之地也
按和

繪上繪下の町をあらと惠宗の上下
業平信乃守在原

從四位下笠朝臣曆封七十戸田六町小椽正七位下門部連御立大目祇

八位上山口忌寸兄人各進位階以通吉嶺路也今此地去美濃國府行

程十余日於信濃國最為逼近若為信濃地者何令美濃國司

遠入關通彼路哉由是從正範取定
●衣嶺小吉嶺は信濃に

属しとすすいつこの時より今按延喜の御代も依りし

もその依りありし信濃國ふわりし

五十九代宇多天皇
卒三代冷泉院御代の

向凡十餘
拾遺集源賴光中くいつひもて行はたふらるる

の橋とくは延喜の古今集少く
六十代 天曆の後撰集
六十 二代

とくは拾遺集少くは行はたふらるる
拾芥抄曰拾遺集
一條院長徳頃藤

原公任撰之或花山法皇御自撰
源賴光冷泉院判官代上総介伊勢攝津但馬
備前美濃伊豫等轉任
美濃國府にたてし
幸ひ今昔物語に及ん

此方國史の觸とて補ふ是るる
源平盛衰記本を安曇郡と

記すは
福清

或日若櫻宮御代洲羽大神孫弟武彦
命任賜木襲國造又日日本武尊留更級縣渡海越山擊洲

輪國遣黃嶽武彦連伏雁越之諸國遇武彦連從大北國

經木襲國出箕野國

あまのの信信とては按古事記に

乎科野の坂神を言向
按に心ふる
尾張の國に還つた

日お記ふ王忽に道を
伊奈を御坂を城

かこわつて
伊奈を御坂を城

かゆてその信濃國を
計し五百八十餘年と云く大寶二

年好く
上世の

河た
上世の

岐曾乃御坂 並川 麻衣

續後撰
権中納言長方

吹
鴨長明

夫木
從征行家卿

み

風雅 家集の世をさぐる本邦の事蹟を記す。兼好

按麻子ぬい 信濃みやうまふ 本邦の事蹟を記す。兼好

●馬六甲の東湯舟に並好住居の記ありあはれし

附 寢 覺 床 非名所

世に寝る人の床といひく重にたざる事あるをたまりて流る
水のいと白く波のわよみおろし今傍の如く何工削成青巖之形誰家
津出碧潭之色と伝をよみおろし今傍の如く何工削成青巖之形誰家
初さの波ふたらしる松の影さる床とすのり。或山あわのまうや
わらん若夜一すしんを乃伝ふとらう流 初さの波ふたらしる松の影
の影をくまうし信濃川の上 今ハ昌久 今中東よのよはとらう流

の園らとるひすれとあふは事ゆかへをするとぬをくひんははれ

山里の好光の床はさひーすれはるをさる人然とらう流とらう流

此不れをくまうし信濃川の上 以上幽齋先生の
木曾城の全文

●木曾義仲源義賢之二男也久壽二年八月父義賢被討義仲時二歳

幼名駒 乳母 夫中三兼遠懐之道于木曾保育之稍長有將畧治承

四年起義兵拔於北陸道數城退於平家西海世稱朝日將軍 傳畧

木曾仲三權守兼遠 姓中原或
云三郎 三子あり樋口二郎中原兼光 今井四郎

兼平 樋口今井 鞆繪女寺勇名世の初なるは日暮し 云巴女者義仲之妻
長武義木曾七手

組一將 木曾 木曾七手 長武義木曾七手

年九月生朝夷名義秀建保元年五月和田滅亡の後尼とらう流

氏に力とらう流

●^附信濃梅原氏曰いし一甲斐信濃を小梅又此國絶て生ぜず海
橋竹葉三種といふ伊奈郡大竹と生む

●當國五鬣松多^{方言コエフ} 貝原氏信濃五粒松子朝鮮産ははくといふ

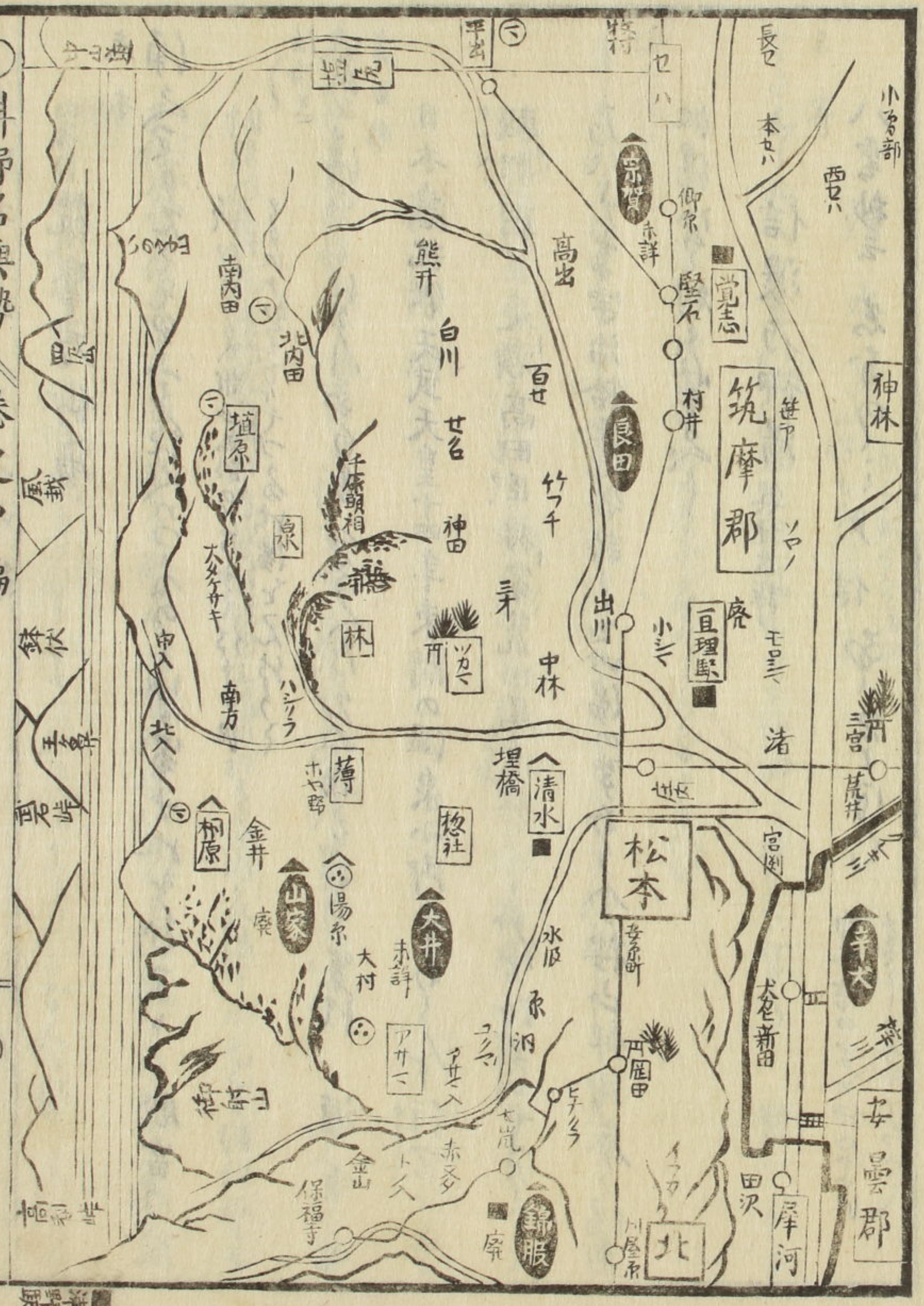
●駒ヶ嶽福嶋のくくく木曾と伊奈に跨南北凡六十里山脉上伊奈

宮處牧よりの宮處牧馬寮式よりの後小野牧宮處の北あり

龍飼山おのききりく信濃上古名馬といふ續日本紀曰天平十年

八月信乃國於神馬黒身白鬣尾今掛駒ヶ嶽の名其神馬といふ

元和年中飯田城主服坂候の哥とく人にありも今續紀の事とすゆを代
尾候ゆき馬の状といふんいおけ



筑摩平乃御湯

夫木 涌るりえそそ思ふく紀人のつるのこゆ家士此をひまら 殷富門院

源重之の御湯のこくけい系白糸の流人たえぬ物とありて源重之の御湯と云ふ

日本書紀に天武天皇十四年東間の温泉小御幸ありて行宮と遊

輕部朝臣足瀬高田臣新家荒田尾連登等と云ふ

尼に字宇治拾遺物語と云ふ湯の事あり今按山部御廢湯系

に湯の事ありと云ふ

信濃乃御湯 具地未詳

信濃乃御湯 具地未詳

八雲抄云 志家のこゆ 信 ありて日こ 印本信の字と伊の字に

清水里

名寄 上巻不出る清水 の御もたれ地ある 齊宮宣旨

世方の言にゆきと水の多ふをそとありて

夏よりゆきをふくふやとては清水の里ふすこつとぬ魚一 大 進

按埋橋村のちある清水の地名遺事ありて

相深川

志那のちありて先川のちこにすそをひまの津ありて

相深川と云ふ地名は林村の境にありて

至依比賣命のゆきとて其日去那と云河會神社に云と

の各目ありて方土に憶説多り

浅葉野立神古菅根慟隱誰故立ニカ 吾不ココ 徳シム 柿本人麿

紅のわさそはあつらふ乃家のくはにあそく油そくかとうりそ 家 隆

ゆふのゆふの乃らにあつらふ小葉のゆふゆふゆふゆふゆふ 爲 藤

君とてゆふとてゆふにゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ 俊 頼

浅葉野信濃武藏入向郡麻葉野名あはれゆふ

吾代等武藏とて本國ふゆ地名ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

東向のゆ中麻葉ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふ考ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

千載 露かうゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ 友原信補

或曰世方万ふふふ浅葉のゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

地名ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

六帖 くらひもゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ 駿 河

世方ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

異りゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

地名のゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ

小縣郡葛梨にゆふ 凡統書よるを二十里ゆふゆふ 西の方斜に洞系水汲

寺の村ありむし申法方に麻多ふて町をさし天正記に云く多ふは
はるの記といふ天正十二年小笠原在道を補貞慶松本に入部きて同十五年
まぐ小深の町くと建法寺なり其系所はつて麻多町なりと云ふことあり
今いし所の名もつりぬ●又安曇郡大町北二十里小田野は後醍醐天皇の
て麻多と稱すいふ一の麻多とれりといふ後醍醐天皇の

聖武の御時天正に須波岡と廢一郡を造りしをさ東よりかき
なりと後世又まことまふてさふりて●婆と麻との同韻をりし

例ハ拾遺集存此をさばくは沐のつくくとその方ひりふををはく
つがゆくと新撰万葉にゆく鹿島成筑波之山之筑と碓より此

六帖ふげくまの山とてて婆と麻を通りしをさ入くさ借さふりて
ゆりすあり常陸の筑波川と筑麻川とささ信濃の千段河と筑摩川と
依くる因同名の名目ゆりて由此觀之流葉と流るりしをさ

孝初より或人言中央國府の地は野多事いふと嗚呼夷より復に
すくよの昇平は御時おほき土のよをさ今をさく言ふわらふ
既に鎌倉の時よりも相原地系の牧地ありしも
初より

附

僧英

法燈國師名覺心姓常澄信濃國神林御人下畧

贊曰身居東鄙名塞寰宇云按瓦摩郡神林の産るふ

●大明國師名普門號無闢信州人其地未詳初在東福寺渡海後宇多帝

弘安三年解纜正應年中飯朝云龜山法皇傾心於宗門天平興國南禪寺建以

師為関山祖正應四年冬化歳八十諡大明國師又号佛心禪師

●關山國師 諱 慧玄 號 關山 姓 源氏 信州人 在處 未詳 花園院正法山

妙心寺建立為師於關基延文五年冬寂時八十四歲賜佛心覺照

禪師賜諡本有圓成國師

有明山 名寄竹屋云々 夫本嶽云々 一云有明山非名所

續古今 加一記の衣子さく志く流つらるを山にさきさく雲 彼鳥羽院

新捨遺 やうりけり山はほくまにさきさく月影の影ハ 行 家

夏修さ家の松くえは城く月影源一有明山やは 前中絶言定家

有明山安曇郡松川の面にあり信濃の安曇と叫ぶ例の西行はちよ

その人けにあり又曉枝山の東南に山を有明と云ふ其の東にあり

わんざと他もいふなりと云う尾の山とて遠ひぬなり 宗祇

方角抄不更級と有明山の分と云へ入らぬをたはたせさるや

位 山 ハ云抄飛騨武行流し云々 又本志分の又英流云々

六帖 衣子の名はさきさく行流し流つるのやぬに君々々に 夫人さる

或云 此分にいふも飛騨は固くありさきさく伊勢物流にわたるの

固いぬれ山と云ふなりと云ふなりは伊勢大和ふゆ流るれと河内も

くともかくさきさくに信流さく飛騨とてさきさくやさきさく大いに

つとむ信流さくさきさく

笠取山 又本信流云々 或大和

家 法子にさきさくのたみや出ぬんむるるぬきさく山 西行法師

按六帖に雨さきさくいぬ山さきさく山やいつと云ふん

此方山嶺勿論あり一と其地東洋西約と人此國に履歴あり
野美山嶺に此嶺のをふるるぬ一と位山の所も又同一と國
ふにり山といふ一と今に境さるるをといふ

附 阿都佐川 非名処

水篤莉 信濃乃真子吾引者 宇真人佐備而不言常將言可母

右久米禪師甥石川郎女時作奇 ●加茂翁云 皇朝の古さうはた木のものに依り
膠して竹と金をすすまはなるる兵庫式ふ季一と見たり

舊説 本朝造子に本信濃ふと一とみる一と
又日本武考東征のよに 科野の山中にやうの

三月信濃國獻梓弓一千二十張又慶雲元年獻梓弓一千四百張

陽成天皇元慶二年五月下符相模國令採進槻弓百枝安房國

百枝信濃國梓弓二百枝但馬國檀弓百枝備中國柘弓百枝備後國

百枝云 延喜式祈年祭料甲斐槻弓八十張信濃梓弓百張十一月

以前進之と見たり今按梓川安曇郡小あま 水源甚深一又佐久郡

千隈河の上梓山村梓川あり共小弓と名付地名あり 清和帝貞觀

正六位上梓水神須々岐水神並授從五位下按松本の東に薄町あり 九年三月信濃國

須々岐水は地あり一と山々の國史に文にうて安曇郡小記あり 大寶二年三月梓弓

を獻て同年養濃國政曾の山道とひくく見たり其地隣近をけり

信濃の國府に通一と今境嶺を松本へ六十里古道と云ふあり

按上世岐曾ハ美濃ノ麻績村上日岐ハ更級ノ生野生坂古の日岐あり一と今
村松本と限するなり見ゆ此嶺麻郡いづくもかりふ矣系保言以北
と云ふなり以南と帆麻郡のくぬち一と方あり一と大雲の属せり一と知るなり
本宮と帆麻郡にありて其雲の境と増す一と中せり一と境ふるる葉室亞將
信く本宮を其雲と記し一と見ゆ ●ついでりよ未抄云梓山番ハ雲野抄不
國史本宮の帆麻郡と境と増すの記あり

又曾丹集と云ふの多分事いふ所なり

あつた山みの中道にえつたりと云ふに此はあつたをさうして 好 忠

倭名鈔安曇郡 郷名四

高家 太木倍廢 未詳 八原 夜八良友 矢原村存

前社 未詳 村上 已廢

●高家廢 按倍たつたより家山 大町あり 至越後系魚川百早 余里中交易樞要地 北小海ニツあり

上りりと青木海と云ふ中ありと云ふと云ふと海のいふと云ふと云ふ

仁科と云ふ大町の西に云ふ川川の川に云ふ根新田館内寺の地名なり

高家の遺り名なりと云ふ 川川の五六嶽小川の又北の方野に云ふ川に云ふ此と云ふ

●八原郷廢て久原村あり東鑑系庄なり 按後日 元正條に遠江國依笠郡倭名鈔依野郡に依る後世

●前社按今の十日市中此郷なり かの廢郷と云ふ河會社に依るなり

●東鑑仁科御 厨住吉庄大穴庄 手村あり 北条庄前見庄 按前見の義なり 庄と云ふなり

千國庄等と云ふ此郡 此の同書多と利牧ハ田多井村あり一牧村ありと云ふと音便と云ふ

わと唱と云ふ一地形絡泥に依るなりと云ふと云ふ 古事記太院理令注 線柱といふ倭名鈔

●大町の北に借馬村あり少按此を依る一字に川を例 又いふと野の真鹿つ入りの借馬回一地名なり

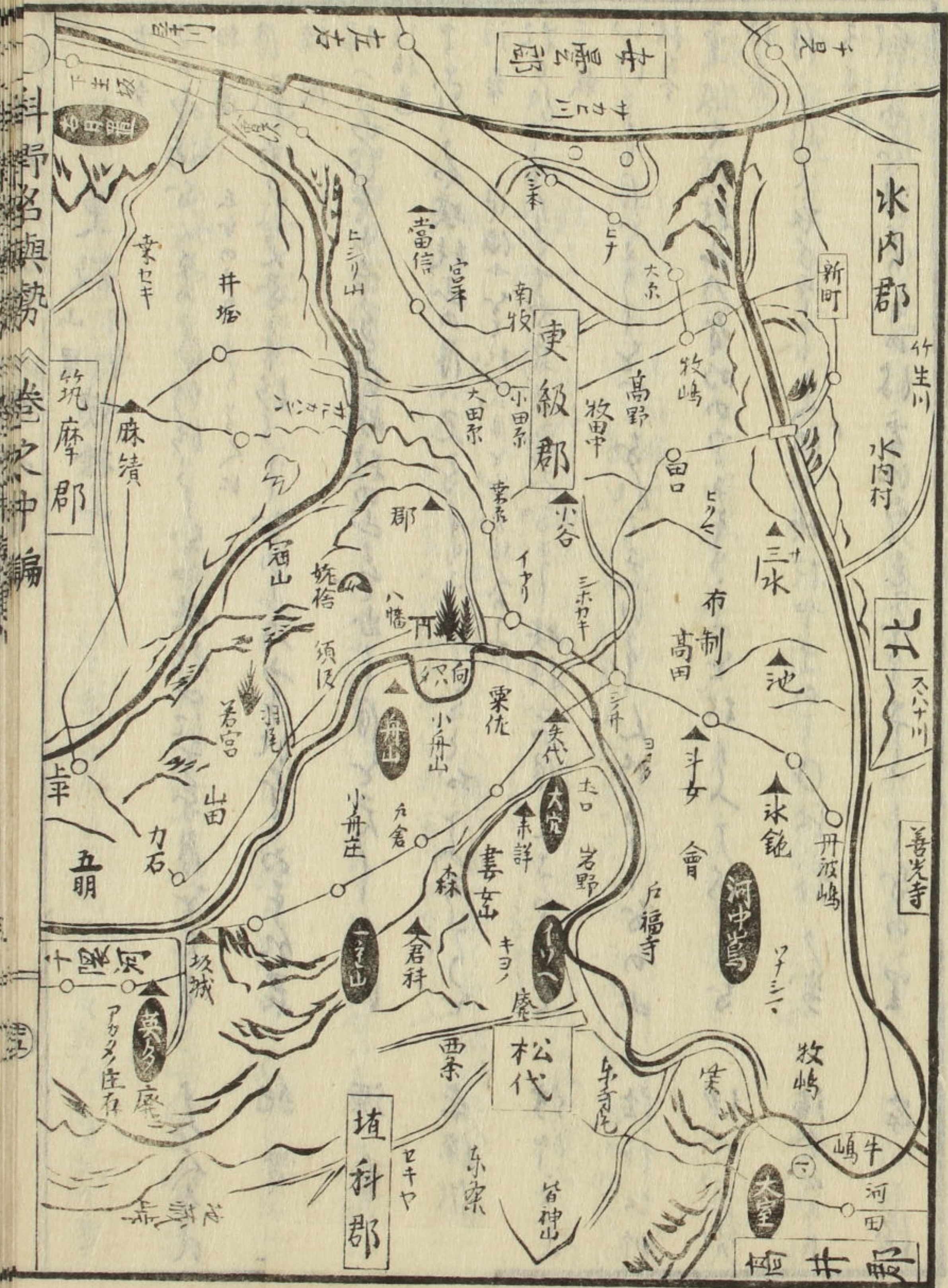
●世と云ふの字 此の同書多と利牧ハ田多井村あり一牧村ありと云ふと音便と云ふ

わと唱と云ふ一地形絡泥に依るなりと云ふと云ふ 古事記太院理令注 線柱といふ倭名鈔

●世と云ふの字 此の同書多と利牧ハ田多井村あり一牧村ありと云ふと音便と云ふ

わと唱と云ふ一地形絡泥に依るなりと云ふと云ふ 古事記太院理令注 線柱といふ倭名鈔

保高沐社のまに物さう墓ありし●つるりの本郡の地名成相
 住吉吉野新屋日置小室等ハ姓多シ一備馬も續紀に足千見ハ治比
 姓多治比と云ふらみと唱ふが如し千田ハ千姓板取ハ板姓をいふが如し
 角平ハ角姓大綱中つる等の地名も又回一都宗ハ都乃の古言なり
 ●あまの山 池田町の東北世里舟場の水大塚新田のうら揚籠村乃上より
 山徑峭峻人の登る半穿り峰をさす窟を攀危巢多きと云ふ岩
 室の廣さ數十歩中方三丈のひろ石なりと云ふ山姥の石たといひ侍へ
 て又あけろ山本者よりと誠中なり 水内郡條下 ●温石 今千國のひ
 れ山中に物さとのろ倉一舶来和産の温石等にもくろ石印彫刻より
 一或云是即青田石の類ひあり和物の彫りさぬる石等にもよる



和野谷集 卷之十

更級 山里 姨捨山

古今 更級 山里 姨捨山 源重光

拾遺 更級のよりまうるくに 紀貫之

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

後探 更級のよりまうるくに 源重光

照子 更級のよりまうるくに 源重光

今更 更級のよりまうるくに 源重光

映枝 更級のよりまうるくに 源重光

更級川 更級のよりまうるくに 源重光

御言川 更級のよりまうるくに 源重光

大和物 更級のよりまうるくに 源重光

とをむ 更級のよりまうるくに 源重光

おほく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

のほかく 更級のよりまうるくに 源重光

其れは正徳堂永の江くやひりは雲水此所に掛湯くくいとやゆく
任ふせり 按者より此地の用寂子より人多く菅原

よりて庵を以て映扶山入相の清りてまづつ物かやとまれむ

白波緑林のたぐひ絶多ひ木くなくざるの願院に任ふひぬふ事

冠山更級川田毎月桂樹映石錫石煙石川保石室池鏡臺山有
明山一重山雲井橋より十三景といひるくまると清臺山下の植科

郡と云ふは又更級里千隈河鏡臺より一重山郡初より一重山と云ふ禪林より一重山下卷
植科郡に云ふなり

中麻 宗

中麻 万葉十四信乃同奇 宗爾宇伎乎流布禰能許藝氏宗婆安布許等可多

思家布爾思安良受波 ●世の中麻宗の系より人廢の俗より加茂翁曰非こ
く唐の秋ハ風洞よりいふことより一重山といふなり

俗江と取へ
くくく

仙覚律師抄曰中麻宗ハ河内北洲のほるごりなり 一説はふごを麻
宗とてり用ゆ

或抄に中麻宗のくく國族とせしむるのくれといふ 按地名
勿論なり

今按に洲を麻 天文軍記
真名頭作

高井郡間長瀬等の地共に洲小むるなり是古語の遺るなり

そのく中麻宗の地恒まづ久しきなりやるて其方をいふ事なく思ふ

説の史ゆかたり 按延喜御宇諸國郡郷の各々に定むる先三百
年 近江の朝藤原の朝ありて其化を隔地の麻原といふ 仙註小

東宮切韻を引く 東宮切韻九卷
菅原是善作 限又洲則嶋と同一洲ハ水中可居

處也といふ今地理小據て按に河中なる地なり 河中島地名
盛衰記及東

鑑 出 此ハ信濃八郡の水會多れを海はの名にりては植科郡磯部

よくしは對地す石井高かの御中にありしゆん中麻奈は奇の
相同性来 俊基悦目抄云 船泊地に別をすしたる心かありしは
すまふいし中麻奈の地名持し中島と兼存ありし

多波志福山

山家集

三つもせたりし山は移さしけわにうそむしといは 西 行
按多りし山陰奥ふあま名不集はて深て信波とい首秀衡
橋を植さる芳野山はも今言彼を撰に足るるて橋おほく
うけわにいふ地もあらずといは土人のみらけくの芳野といふ
此歌詞ともみらの國平泉ふむひる多りし山はゆふあま
本はまくるさやに橋のかまらえくさの暖すを足てさゆくはる

ふりといし信濃も同一地名なるもゆきむとわひあつるに神名式
更級郡當信神社倭名鈔更級郡當信郷名又由和名昔に願ふ
今按當信タギシナと訓まし倭名鈔タギマ麻男ナマシナ信等シナの例より
今更級山中官事村にありて度師といふ村も由是當信の遺名
ありし又伊奈郡タギ駒科村あり 駒六清 濁二音 駒科當信或同訓をさしと
夕の音といれしは度師の名残りありしは

倭名鈔更級郡 郷名九

- 當信 方廢 師村存
- 小谷 手宇宗今 長谷村存
- 池御 以久即今 云野池
- 氷鉞 比加宗今在 上中下三村
- 麻績 今属筑 麻子郡
- 村上 已廢
- 更級 未詳 疑 郡村乎
- 清水 即仇水 村存
- 斗女 今戸部 村存

●村と郷廢未詳疑は今小縣郡村松郷是乎終乃ぬ一

事出下卷小縣郡條正

村との信濃の氏族武名世に志ふ所し大系圖小源頼信二男隆真守

頼信の後に村と彦四郎義日其子彦五郎朝日と云くたふハ村と

彦四郎義光と云べし護良親王小住一村と平賀ハ信濃に在

る多べし●當信答志タラシ亦仍るも同一中代を信字と誤にせ以て假名の

邊ハ多し度師の類是し●小谷ハ所今の長谷と或云をふハ小畝フウチ

の義ありし山谿の高低あるも田畝の高低あるもよく記す

按高井郡小内とて埴科郡大穴郷於守赤カキモリ萬葉卷廿信濃防人小長谷

部笠曆と云くたふも本郡の義ありしおろまのまとかいこわとくこの

姓氏録に小長谷部造ハ神八井耳命の後にすらくれりや按赤のたかひく夜麻と云えてこのゆと

小

長谷部を倭名抄郷名を記すにふて例ふ四字を省て小谷とせしむる

を依へし小長谷部尾張部諏方部の類ハ二字に紛へて記すハナハセ

後世に他小つひりしたふく唱に名種ありしと云ふ也

●更級卿いとゆふ級の因ありし今この郡に入村あり●清水郷ハ今の

三水ありし之美都ハ澄水のすみと約さる又之と佐とをよ冷水をサミ

ツといふ方言見し●池郷願氣亦仍るも同一今池の地名ニ方言

に野池ハ池といふ野池のうらむといふのぬへし●斗女郷今戸

部百部亦仍る是大戸の姓にゆへし●氷鉈郷比加素の義未考

或人云古事記ハ阿曇連等者其綿津見神之子字都志日金

拆命之子孫也姓氏錄安曇連于都斯宗賀命之後也

云

氷鏡斗女神号安に少くは

孝子

神護景雲二年五月更級郡人建部大垣為人恭順事

親有孝子云

●本郡地名田口廣田布制桑原長谷日置清水等ハ姓を取極一
篠井ハ篠の姓願氣ハ伊氣の姓會ハ阿府の姓綱崎ハ綱部丹波清
ハ名にその姓等あり一●今の會澤ハいみへの波用科あり一
羽尾ハ鰐之丘なり此も清田あり一日名ハ日野あり一昔越後江
蝦夷亂とたゞ多事なえを固史に足中北を烽火の備ありん
黒坂ハ火入の山なり越中の水入火入あり一

●按更級郡ハ麻績村上日置等今ハ漆部ニ屬スリ延喜式

倭名抄等と推考よ東ハ宮賀村松より 再考小縣郡當郷村松ハ上世二郷あり
元和年中言と記スに本郷村松とあり

大境清し尾と越々會同瀬沢の色 上世の筑摩郡ハ赤名
右沢郷名等にあたり 西ハ安曇郡に及

角 日置嶺方
寺の地名也 角ハ光塔沢北ハ生野生坂 往昔の日置是也といハ天文
軍記日置古城生野のよあり 麻績

郷に及て上世の更級郡今の地に倭せりと見え一ウ筑摩郡の境も大養

郷より多かりに西山よりぬ角一さて政産と筑摩郡よりわらせり

時の郡縣割割今に多かりあり一

都井 丈木信徳云

家集 三ノ井と安江とをいかにか一三ノ水もつらふ井なり 鳥仲朝臣

一々地未定ぬべ一或諏方社頭ノ井はもと云ハ宮古井の借字にかつり

七久里湯 八雲抄伝徳云

後指志

つさもせきまに波をこく人あやむるのいてゆるらん 相 模

いりしんをさるのゆのそくむといつははは清くあらん 基 俊

家集

世人の志乃やうひの業とやせうのあはれ久くあらん 二條大皇太后宮肥後

二本 志乃のしよ

いちーの根ふいつかなるのうひうひの湯もあらん 栲後徳治

按あつう湯伊勢佐波田名といふれもいちーの伊勢をふへー今

一志那小七粟と稱する御わを 倭名よ かの御中一色といふ里に湯涌出

とといふ今伊奈郡伊賀倉屋といふ清久里と云村あり湯はうー湯川は

は名のこわいと云はぬいすいすに於るぬへー

中巻補遺

後拾遺能國御坂等

按之河ちあふへといひ下て英流玉洲候よりわてよあふむ

是今の志奈の嶽あり中山道志井より大垣洲候を経て英流川本原の寺と

いり尾羽清洲の湯より三河をへ入りの道路へ更級日記よ三河く尾

流あり志奈すいれよりあはれひさつひねるかへ尾流ありこの浦と云

夕志不々こらにみちてあひやかんとちるあはれまきあふと云

一とあはれよりをやとひさぬみのあはれ候す乃あふといひあふりー

更級日記菅家五代孫孝標女自記

美濃國中川 按神名式惠素郡坂本中川惠素等の三社又土岐系を

中川殿と云太平記は源満仲中川の盜賊と誅といふ坂城のまうひ

あせー賊ありーの中川今の中津川也

●詞華集風越峰哥 藤原家經 文章博士式部少輔正四位 下左大弁天喜六年五月卒 信濃也

下り付とつらう御坂と風越峰と附あそびていふ所は此哥に云ふ所也

●曾乃系第本條 神中抄之家成卿身合藤為忠鹿の哥基俊列河

下卷九下には 按信濃風土記のうらほりてえらる藤原基俊 從五位下 左衛門佐

●浪合村尹良親王墓 應永三十一年八月南朝一品征夷大將軍

兵部卿尹良親王於伊素郡浪合薨浪合紀といふ所は近元之

遠に國人飯谷并伊女道政等官方也宗良親王と遠州に奉迎

後醍醐帝第三皇子始山座主尊澄法親王 後道政女産尹良親王 於吉野 妙法院宮還俗号宗良親王 諏方條下哥あり

正二位大納言之中 三年八月賜源姓 かく應永四年上野の官方世良田桃井新田小田並

山家七名字等 所謂四家大橋岡本常川山川七苗字堀田 平野服部鈴木真野光賀河村等也 遠州の諸士と相計

尹良親王と上野に移さんと先駮列字津野といふ所は鎌倉の方人親王也

柏坂に筑ひ丸山の彼と名ひ其外此の押留も兼て漸める五年八月上野寺

尾城 寺尾世良田 政義居城 其後政義女法子と産む是と良王君と稱し 後下野 國落合

生長り小倉合 桃井氏の居城 ありて應永十九年四月上杉憲定多勢とありて

寺尾城をぬく親王のりて信濃より諏方此千野六郎頼憲の

嶋崎の城に據此時國人小笠原政秀千久祐禰高坂滋野等官に

属して暫安一掃も應永廿年上杉禪秀より小栗満重等

の支配して關東の擾乱を止む時あり此處より宗と藤と揚人と諸士

相議して良王君と引きて再び下野小倉合城に還入す

于時應永二十一年七月八日八月十日尹良親王諸士と卒て二にのよ
趣あり別よりして千野伊豆守に一首の号と賜ふ

この地の名はありおとほもそむじあり定りぬるに族の元 尹良親王

同十五日飯田を経て駒場 元慶軍記信濃國駒場 大野と云ふあり野伏

紀て水陸より警ある此日大雨あるに未刻より猛烈風東西と云ふ

飯田を駒場の次郎と名乗て宮と射なり半急に柳井世良田相

川兄弟一宮酒井六郎同七郎熊谷大庭本多等の勇士且残ひら

退く大井田一井死之すくに防戦の力なく小山の藤原の在家は沙塵と

解入ると宮則法自害下野入道以下五人自殺一家は火と殺て

自燼 人ト ●又永享七年十二月朔日良王君と尾張守なり

清光の大指三河の野奴城より移すべしと諸士護送して浪合と云ふ

村あり故應永の餘黨起て籠る世良田桃井勇と振て百二十余人と

討たせしむるに二日世良田桃井と始て四人自殺し

名と野原よとむす以上の石碑浪合村聖光寺あり

●犬房丸墓 傳云曾城兄弟夜討の時時致生捕りに祐経子犬房

丸翁りて五郎の面と打ちると右大將圍みし武士の道は跡ありか

不覚の老遠流せよとして伊奈郡に流さる 小出宮田飯方赤本 中城五郎と兼地とい 流は教免

あつこの地は北へ小出の上ある山隙に葬ると云ふ 未詳

●諏方條下 顯昭神中抄云信濃のすはの神れ一宮と中と人ふ神の

りて志とみ晦るの敷通ひるありとすはの海氷てありと云から

こころにゆゑふれはあきらけい此水津よりみまきり氷のよきんてまふ川且
に氷とよくとく 按 塩河百々 依仲卿の奇西沢の源と此此川よりけり

●古説より射山の系に皇之光ありと云今も佐久那松原の社のこゝ

山系 毎七月廿七日 八ヶ嶽の洞は日月星と云るをとりて八ヶ嶽は佐久那よりハ

雪よ見阪方の御射山より東よりあり ●御射山條下 神長官

稱宜大夫擬祝部 又副祝部 以上五官といふ

●信濃なる本宮の傍奇 一云源頼光冷泉院判官代ありといひ

中納言維仲卿の女と云て詠りてさる事ありといひ今昔物語よ

守少く美濃の國府小おんせりハ後也長保三年式部權太輔大江

匡衡贈美濃守源頼光狀本朝文粹小んていふ

●野麥峠 處と系のれく坂嶺と號て飛澤御守寄合戸峠といふあり

飛澤より野麥峠といふ筈實方言野麥といふあり筈字は飛澤系

中白く粉あり小麦といふり山民和して編よゆる筈小竹く神代記野槌者

採五百箇野筈八十玉籤ありといふ是く万葉水筈川信濃といふあり

後世ハハハのこけのすかてといふも管掛の名もまよ記あり

●國府東間 小嶋の東林村の西にあり北面は惣社あり圖よるより

●小笠原氏井川館 甲斐守源義光 号新羅三郎十訓の孫加々美遠

光文治元年信濃守ありといふ其二男小笠原長清の子孫

相續て伊系郡に任す信濃も貞宗の時よ至て始てつゝま郡

井川に任はせしと小嶋井川の館といふ 貞宗貞和三年卒 其後長保の

以よむて林の館より移り又水心の中深志城より移り

●信濃宮 後醍醐天皇第三皇子還俗宗良親王元弘三年征東將軍

に補ふとよゆ引せり信濃宮と申 又上野の宮尾 井伊谷宮尾 延元元年井伊谷具引と申

遠州奥山の城より入る二年の冬源顯宗は是せられて上洛又の年在時より

遠江より向う遠江よ入て所子具良親王より合口四年源方以後常凡

小田の城より渡御五年下妻の城より據六年越中より渡り正平四年上毛

新田庄より移り七年義兵を起り碓氷作より御より宮法より合口

後より河内小山田庄より宗居より藤原より弘和元年新葉集を撰り奏

せり後藤より井伊谷より徳正元年七十とすえり

色部義季義教

